

『ジーキルの美しい庭』解題

土屋 昌子(学園史料室)

ガートルード・ジーキル著 *Colour Schemes for the Flower Garden* が、邦訳『ジーキルの美しい庭』として2008年2月15日に平凡社より発行されました。園芸文化研究所の先生方には、監修の労をとっていただき、出版に際し恵泉女学園同窓会から出版助成として奨学金をいただきました。関係の皆様にはこの紙面をおかりして、あらためて深く感謝申し上げます。

本書は、ジーキルの著書として本邦初訳です。冒頭に1988年版に付されたビスグローブの序文が掲載されています。このやや長めの解説は、本書成立のバック・グラウンドと、ジーキルのガーデン・デザインの特長について詳しく述べられていますが、初めてジーキルに接する方々にとっては、ややわかりにくい印象を与える内容ではないかと恐れるところがありますので、ここではこの序文の解説、という位置づけで、ジーキルがアマチュアの園芸家として歩み出すまでの前半生と、ロビンソンとジーキルから始まるとされる造園様式およびその庭園史上の位置について、最後にジーキルのカラースキームについて若干の解説を試みます。

1. 生涯

(1) 美術学校入学まで

ガートルード・ジーキルは1843年11月29日、ロンドン市内グラフトンストリート2番地に父エドワード、母ジュリアの4番目の子供(6人兄弟の次女)として生まれた。ジーキルの家系はガートルードから数えて12代、15世紀までさかのぼることができる。代々著名な軍人や聖職者、法律家などを輩出している。王室とも親交が深かった。

祖父ジョセフ・ジーキルは法律家で国会議員、父エドワードは陸軍大尉を

経て退役軍人となった後、結婚しロンドンで社交や外遊、趣味の音楽を楽しむ生活を送っている。貴族の友人を含むアマチュアのオーケストラを結成し、週末には自宅で演奏会を開くことを恒例とした。母ジュリアは銀行家の娘で、音楽に造詣が深くメンデルスゾーンからピアノの手ほどきを受けていた。子供達が誕生するとエドワードは子供の教育のために郊外に家を購入し、家族はガートルードが5歳のときロンドンの南50kmほどのところにあるサリー州のギルドフォード郊外に転居した。

兄弟は学校へ行ったが、ガートルードは姉のキャロラインと共に家庭で教育を受けている。他の裕福な家庭の子供と同様に家庭教師から、読み書きと絵画を習った。

17歳のとき画家を志し、ロンドンのサウス・ケンジントン・アート・スクール¹に入学する。在学中にデザイン、デッサン、解剖学、色彩論などを学んだ²。ここでラスキンの講義にも出席している³。ジーキルが在学中の1862年には第2回ロンドン万博がサウス・ケンジントンで開催され、その前年に結成されたモリス・アンド・フォークナー商会在ステンドグラスや家具の展示で賞賛されている。アーツ・アンド・クラフツ運動の興隆期であった。

(2)青年時代

1863年に美術学校を卒業した後、1870年ごろまでの数年間は画家になるための修行時代と考えることができる。ジョン・ラスキン（1819～1900）やウィリアム・モリス（1834～96）との交友関係を通じて思想的な背景を育みながら、大陸各地に旅行し見聞を広め、芸術一般について広く経験を重ねた。

学校を卒業してすぐ、父エドワードの知り合いで考古学者のチャールズ・ニュートン夫妻の中近東旅行に同行した。イタリア、アラブ、ギリシャのいくつかの都市に滞在しながら3ヶ月間各地の芸術を見学したが、ジーキルは芸術への開眼と共に、地中海性気候のもとに育つ植物に強い興味を抱いた。このときスケッチを重ねた地中海性の植物や自然風景の印象は深く残り、園芸家となってから庭に描いた風景画のイメージの根源ともなっている。

このニュートン夫妻は美術批評家ジョン・ラスキンと親しい交友関係にあり、ジーキルは彼らを通じてラスキンのサークルに招かれている。ジーキルは学生時代以降、ターナーの作品に傾倒しその模写を通して絵画の技術を学

んだ。ラスキンの『近代画家論』(1843)は彼の美術評論家としての最初の著作である。画家ターナー⁴を擁護するために執筆を始めたものであったが、全5巻は一人の画家の擁護論に留まらず、文学と絵画の両面から自然と真実、芸術と教育について考察した思想書となっている。ジーキルはラスキンと交流を持つ以前から『近代画家論』に親しんでおり、美術学校に進んだ背景にはラスキンの美術教育論による影響が強いと考えられる⁵。このような環境から、ジーキルはラスキンから直接的な影響を受けていたと指摘することができるだろう。

ニュートン家の人々との交友関係の中で彼女は、ラスキンやロセッティと共に彼らのサークルのなかの一人であった水彩画家ブラバゾン⁶と知り合った。ブラバゾンは、ラスキンによって「ターナーの後継者」と呼ばれた画家で、これ以後生涯にわたってジーキルの絵画の教師となった。また、ジーキルはこのブラバゾンを通じてバーバラ・ボディコン夫人と親交を結んでいる。夫人は画家のワット⁷をはじめ広い交友関係を持つ資産家であり、ジーキルが水彩画を展覧会に出品するようになると彼女のパトロンの存在ともなった。1866年には夫人に同行してパリに滞在し絵画と音楽を学んでいる。音楽はガルバーニに師事し、絵画はルーブル、ブレラ両美術館でターナーを中心とした模写を行った⁸。

ジーキルはどのように絵画の色彩論を学んだのだろうか。ジーキルはサウス・ケンジントン・アート・スクールでラスキンの講義を受け、シェブルール⁹やターナーの色彩論を学んだとされるが、サウス・ケンジントンを創立したヘンリー・コウル¹⁰がめざしたのは、工業化によって大量生産されるようになった製品の質を保持するために、美術教育と職人を結びつけることを目指した職業美術教育であった。そこで用いられていたパターンや教科書は、比較的初等レベルのものが見られる¹¹。同じ時期にジーキルはクリストファー・ドレッサー(Christopher Dresser 1834-1904)やオーウェン・ジョーンズ(Owen Jones 1808-1874)などの装飾デザイナーから強い影響を受けており、色彩論にとどまらない広範な色彩やデザインの基礎を身に付けている。一方T.H.D.ターナーは、1983年に出版された『花の庭の色彩設計』改訂版の序文で、ブラバゾンの師弟関係から、ジーキルの色彩理論は主としてターナーか

ら影響を受けていると述べている¹²。また、ジーキルはしばしばパリに滞在しているが、この時期はのちに印象派と呼ばれるようになる画家の一群がパリで生まれようとしていた時期にあたり、「ジーキルは画家としてパリで印象派と共に過ごした」¹³とも言われる。このため彼女が庭の色彩を考えるにあたって基本とした色彩調和の手法は印象派からの影響をうけているとも指摘されている¹⁴。ジーキルと印象派の画家との関係を重視するのであれば、印象派に影響を与えたとされるシェブールの色彩論¹⁵をジーキルがどの程度取り入れているか、また交流関係などが明らかにされなければならないだろう。

ジーキルの青年時代を振り返ってみると、彼女が色彩論について学んだのはサウス・ケンジントン・アート・スクールでの学校教育やその時期に限定するよりも、幼少期から青年期全体を通じたものとしてとらえ、ラスキン『近代絵画論』からの影響や、美術学校を卒業してからも続けられたターナーの作品の模写、モリスをはじめとするアーツ・アンド・クラフツの装飾デザイナーと交流、パリやアルジェリアなど大陸での美術作品の研究を通してであったと判断するのが適当である。しかしサウス・ケンジントンで言語化されたアカデミックな色彩理論を学んでいたことの重要性は指摘されるべきだろう。

(3)美術工芸家として

ジーキルは1868年には友人を伴ってイタリア旅行に出かけ、約1年間リビエラ、ベニス、ジェノバ、ローマの各都市に滞在した。ローマではギャラリーに通い、彫金を初めとする工芸を直接に熟練した職人から学んだ。庭園にも関心を広げ、ハドリアヌス邸やエステ荘などのイタリア式庭園を見学している。

この年、ジーキルはロンドンにウィリアム・モリスを訪ねたことを日記に記している。当時のモリスは装飾芸術家(Decorative Artist)を自称し、イギリス各地で失われつつあった伝統工芸の再興に力を尽くしていた。モリス・アンド・フォークナー商会は成功を収め、植物や鳥をモチーフにしたモリスや彼の工房の職人たちのデザインが、ステンドグラスや手彩色のタイル、家具に描かれ、またテキスタイルとなって次々と生まれていた時代である¹⁶。この年以降、ジーキルは刺繍をはじめとする美術工芸全般に力を注ぐように

なった。刺繍では、美術学校卒業後から植物のパターンをデザインし、刺繍家としてすぐれた作品を残しているが、モリスのパターンとの共通点がうかがえる¹⁷。モリスとの出会いの後、数年間はテキスタイルと刺繍に集中して技術を身に付け、美術工芸家として作品の制作依頼を受けるようになった¹⁸。刺繍のほかに手がけた工芸は、彫刻、家屋の塗装、木工、金属細工、レブッサー(repousse)¹⁹、ギルディング(gilding; 金メッキ)、象眼、はめ込み細工などに及ぶ。

翌年ロンドン郊外のバークシャー州ワルグレイブ・ヒルに転居し職業婦人として独立する。ガーデニングと植物のスケッチは日課であった。

1873年の冬はボディコン夫人の別荘のあった北アフリカのアルジェリアで過ごした。美術の教師を雇ってアラブ風の絵画や美術品、庭園などを学ぶと同時に、アルジェリア大学の教員の指導を受けてさまざまな園芸植物——フェネル、ユッカ、アイリス、オリーブ、イチジク、アプリコット、ヤシ、バナナなど——について英国との育ち方の違いを土壌や気候条件と比較して学んでいる²⁰。1875年には兄の友人であったウェストミンスター公爵の依頼を受け、改築後の Eaton Hall²¹ の内装の責任者となっている。広い屋敷の各部屋を統一したデザインで装飾し、壁紙や家具、カーテンで飾るため、イギリス国内ばかりでなく大陸からも製品が集められた。カーテンの刺繍はジーキル自身がデザインして王立刺繍学校で作られたものもあった。1886年にはロンドンのブルーメンタルズ家の応接間の装飾を依頼され、壁紙、天井、暖炉のプレート、家具、キルトのカーテン、敷物などを手がけた²²。

2. 園芸家としての活動

(1) 交友関係

① ウィリアム・ロビンソン²³

1875年(ジーキル32歳)に父エドワードの逝去をきっかけに、母ミセス・ジーキルと兄弟と共に再びサリー州へ転居した。この年ジーキルは園芸家として名声のあったウィリアム・ロビンソンと知り合う。ロビンソンはアイルランド出身の園芸家で、ロンドンの王立植物園で研鑽を積んだのち、『タイム』誌の園芸欄の記者などを経て1870年に雑誌The Garden(以下『ザ・ガーデ

ン』誌)を創刊した。1871年にはThe Wild Garden を出版し、自然主義の庭造りを提唱していた。

ロビンソンが提唱したワイルド・ガーデン (“wild garden”)は、樹木や草花を生育条件に適した場所で育てることを第一条件とする。したがってその土地特有の環境条件とそこに合う植物の知識が不可欠である。そのスタイルは英国特有のコテージ・ガーデンの伝統に類似していた²⁶。

一方、古くからある風景の保存に情熱を注いでいたウィリアム・モリスは園芸に対しても伝統的な植物や技術の美しさと重要性を指摘し、建築と造園の分野では地方の独自性(地域性や産出する素材)を尊重した「家と庭の融合」を説いていた²⁵。彼らの主張は一致し、園芸においてはカーペット・ベッディングに代表される外来種を使ったステレオタイプの植栽方法が批判の対象となった。彼らは自生植物の豊かな美しさを表現する庭のあり方を求め、その手本は古いコテージの庭に求められた。ジーキルもこれに共鳴した。このようなイギリスに自生する植物を昔ながらのコテージで楽しむコテージ・ガーデンの理想は、イギリスの園芸の伝統を復活させたものとして、当時の園芸に革命的な影響をもたらした。このような関係によって、ロビンソンやジーキルの庭はしばしば、ラスキン、モリスが唱導したアーツ・アンド・クラフツ運動の精神を受け継いでいるとされる²⁶。

1880年代に入るとジーキルは『ザ・ガーデン』誌に記事を投稿するようになり、次第にそれは定期的な寄稿となった。サリー州の新居の敷地では、植物の育種、品種改良を始めた。この頃には既に園芸家として一定の水準の知識と技術が認められるようになっており、1881年の王立園芸協会のボタニカル・ショーでは審査員を務めている。1883年には母と共にマンステッド・ハウスに移り住み、内装を手がけるとともに庭の植栽も本格的に行うようになった。

②エドウィン・ラッチェンス

ジーキルは生来極度の近視だったが、次第に痛みを伴うようになり、1891年に受診した眼科医から細かい作業を伴って目を酷使する刺繍と絵画を断念するよう指示された。そのため1890年代の前半は目を休めるために、ほとんどの職業活動を停止している。そのような状況に陥る直前の1889年に

ジーキルは事務所を構えたばかりの若い建築家、エドウィン・ラッチェンス²⁷と出会った。ラッチェンスは幼い頃から体が弱く、線の細い青年だったが、建築に対する熱意は熱く、ジーキルのように徹底した細部へのこだわりとずば抜けた想像力を兼ね備えていた。アーツ・アンド・クラフツ運動の推進者であったジーキルと、サリー州の出身でサウス・ケンジントン・アート・スクールで建築を学び、生まれ育った英国南部に残る伝統的な建築の様式美や文化的風景を愛するラッチェンスは、たちまち意気投合したという。当時自分自身の庭と家を新しく造る計画を温めていたジーキルは、家の建築をラッチェンスに依頼した。

(2)「マンステッド・ウッド」の建築と造園

彼女の家の建築は、15年前に購入された敷地に、すでに彼女自身のプランと手によって造成されていたウッドランドと庭に合うものとして計画された。すなわち、家の位置は、二階の彼女の部屋の窓から庭の中心となる通景軸 (Vista) がまっすぐ見通せるように置かれた。外観は風景に合うようデザインされ、使われる資材はその土地から産出されるものが用いられた。ジーキルとラッチェンスは適切な素材の使用法について同じ感覚を持ち、両者とも建築物には堅実さと地方の特徴を取り入れることを重要だと考えていた。ジーキルは建築にも造詣が深く、土地に伝統的に伝わる職人の技術を尊重した。ラッチェンスは目の悪いジーキルのために、家の内部の階段や廊下の幅や広さ、採光などにも工夫をこらした。彼女はその家を非常に気に入り「私に愛されるために建てられた」と述べている²⁸。現場で議論を戦わせながら、ラッチェンスはジーキルが描きだす庭の絵画の真価を認め、彼女の経験を吸収し、それらを洗練させて彼自身の建築デザインに取り入れた。1890年代のマンステッド・ウッドはジーキルとラッチェンスが互いの見解を学びあい、その後の共同事業の基礎となる信頼関係を築いた場所であった²⁹。

そのようなマンステッド・ウッドに始まるジーキルとラッチェンスの共同事業は、爆発的に発展しアーツ・アンド・クラフツ流には「地面から生え出たような家」³⁰と評され、その後人気を呼んだ。ジーキルの伝記を書いたベティ・マシinghamは〈ラッチェンスの家とジーキルの庭〉と呼ばれた英国式の生活様式へのそのような貢献を生み出す共同作業のために、「彼らがどれほ

ど互いに責任的であったかを示しているのは興味深いことである」と述べている³¹。

(3) 執筆活動と写真撮影

1882年、ジーキルは『ザ・ガーデン』誌に〈Colour in the Flower Garden〉と題した花壇の色彩と植栽の方法に関する記事を寄稿し、この記事はロビンソンのThe English Flower Gardenのなかに収録され翌年の1883年に出版された。ジーキル自身の著作は、1899年にカントリー・ライフ社から最初の著作Wood and Garden が出版されてから亡くなる8年前の1924年まで、25年間に13冊が出版されている。さらに亡くなってから3年後に晩年の執筆作品がまとめられ出版された。複数の園芸雑誌への投稿記事は2000を数える³²。

ジーキルは写真家としての業績も高く評価されている。弟のハーバートも玄人はだしの写真家であったのでその助けを借りながら、短期間に撮影から現像までの写真技術を習得した。写真撮影を始めた1885年から3年間に撮影した写真は900枚が数えられている。目の悪かったジーキルにとって写真はデザインの仕事のツールとして欠かせないものとなった。研究対象として撮影した植物のポートレートは2,000枚近いストックがあり、自著の出版の契機ともなったが当初はロビンソンの雑誌や著作の刊行のために使われた³³。

撮影の対象は多岐にわたる。初期は自宅近郊の風景、森、働く人、パブなど郊外の人々の暮らし、家族、訪問者などの他、風景の中にモデルを置き、絵画的な作品も残している。一時中断していたが1890年代後半に母の家から独立して自宅の建築を始めると、自邸とその庭が共に撮影の主要な対象となった。マイケル・ヴァン・ヴォルケンバーグ³⁴は、これらの写真は植物と共にある彼女の経験のヴィジュアル・ダイアリーである上に、完全にデザインの記録であり、また写真記録の比較はジーキルのデザインの源泉がどのように形成されたかを示すと述べている³⁵。

植栽図と共に著書に残された多くの写真によって植栽方法の実際やジーキルの思想が後世に伝えられることになった。ほとんどの植物が失われかつての面影を失った現在のマンステッド・ウッドの庭も、記録が遺されていることはその再現性を考える上で貴重である³⁶。

(4) ガーデン・デザイン

ジーキルがデザインした庭の数は200とも250をこえるともいわれるが、1880年から1932年までのあいだに設計した庭の数を247件とする集計記録がある³⁷。これによると1880年からの10年間に11件、次の10年間は25件で、ほとんどが親戚や知人の家の庭であるのに対し、1900年以降は10年間で55件、1910年から1920年の10年間に60件となっていて、顧客の大幅な増加を示している。特にエドワード朝(1901~1910)の10年間はラッチェンスとの共同の庭造りが一世を風靡した。1914年に第一次世界大戦が始まり、マンステッド・ウッドの宿根草のボーダーにもジャガイモやトマトが植えられるようになったが、ジーキル自身は変わらず植栽のデザインの依頼を受けた。1920年から亡くなる1932年までの間にその数は96件を数える。

本書が傑作とされる理由の一つとして、T.H.Dターナーは1982年出版の復刻版の序文の中で、植栽のデザインはそれをマスターすることが非常に難しいとのべ、「生き物を素材に調和を生み出そうとするとときに生まれる技術的な問題が、どんなに困難なものになるか考えてみるとよい。(中略)色と構成に関する美学的な視点をもって(これらを)扱ったものはほとんど無かった。園芸学と美学的な問題を結びつけて、これに精通しているのはジーキルただ一人である」と評価している³⁸。この文章はジーキルのガーデン・デザイナーとしての位置をよく表している。

ジーキルは庭のデザインについて、「ガーデン・デザイン」という言葉を使うことはまれだった³⁹。ロビンソン派とよばれる人々は、植物が自然にハーモニーを生み出す様子を美しいとして、不自然な「デザイン」は基本的に必要ないと主張する⁴⁰。しかしジーキルはデザインの必要性を軽視していない。彼女はロビンソンの影響を強く受けながら、むしろデザインは必要不可欠であるとする。『ジーキルの美しい庭』の最後の18章には次のようなくだりがある。「庭づくりにおける色彩に関するすべての問題と同じように、植物をどの位置に植えるのが適切かを詳しく論じるには、芸術性についての知識が必要です。植物のどのような組み合わせであれ、最高の効果を持たせようとするなら、意図を明確にしなければならないだけでなく、周辺に置かれているものとの関係において、あるいは植え込みやボーダーの全体的な形状、さらに

はその場所が持つ性質や特徴との関係において、その植物のまとまりがどうあるべきか、デザインをする人の手によって心から確信をもってなされなければなりません。」ジーキルは、ワイルド・ガーデンを成功させたいければ、よく計画されなければならないことを理解していた。

ジーキルの庭に関する詳細な研究書のあるリチャード・ビスグローブは彼女を「アーティスト・ガーデナー」と呼ぶ。庭を美しい芸術作品として作り上げることをめざした園芸家として、彼女にふさわしい名称である⁴¹。

3. 庭園史上における位置

(1) イギリスの庭の独自性

イギリスの庭は、装飾性よりも簡素な美を好む傾向にある。17世紀のフランシス・ベイコン(1561～1626)⁴²やウィリアム・テンプル(1628～99)⁴³の庭も、「心の静けさ」や「ウィルダネス(Wildness)」を好んだ。野性的な自然の美を好み、秩序を保ちつつもはっきりした規則性を排除しながら、全体の調和をめざすこのような傾向は、時代背景によって趣向の変化が見られるが、風景式庭園は基本的にそのような特徴を備えていた。

「英国式庭園」は一般に18世紀の風景式庭園において成立したといわれている。ヨーロッパにおけるそれ以前の庭園様式の主流であったヴェルサイユ宮殿に代表されるフランス式整形庭園から「囲い」を取り去ることによって敷地全体が庭となり、広大な森や谷間が庭の主要な部分となった。風景式庭園では木々は自然に成長し、起伏する地形はそのまま田園風景の眺望となっている。大陸から持ち込まれた風景画の流行に伴って「絵画(ピクチャー)のような風景」を造ることが目指されたため「ピクチャレスク(の庭)」と呼ばれた様式である。しかし風景式庭園は花壇や菜園を排除したために風景が単純化し、しだいに飽きられるようになる。一方17世紀には植物収集家(プラントハンター)が現れて外来植物が流入し、植物学者や庭師がその栽培、繁殖、普及に貢献し園芸技術はめざましい進歩をとげていた。

(2) ヴィクトリア朝の庭

19世紀にはいると産業革命以来の経済的発展を背景として、園芸業界では温室や芝刈り機の改良型が次々と商品化される一方、園芸知識の供給源と

して庭師や一般読者向けの園芸雑誌が発刊されるなど園芸の大衆化が進む。その結果、庭の様式は、ジョン・C・ラウドン(1783~1843)が提唱した「ガーデネスク(庭師のわざを示す庭)」へと変化した。ラウドンは膨大な著作を著し、庭師に対して植物の知識をもち科学的な研究を行うことを奨励、自己修養をよびかけた。また庭には変化を求めて外来の植物を植えることを奨励した。このような姿勢はヴィクトリア朝において他の分野においても同様であり、ラウドンの啓蒙活動はその先駆けであったとされる⁴⁴。

続くヴィクトリア朝中期はこの時代の様式の最盛期であり、ガーデネスクに商業主義が入り込み、庭師が腕を競った技巧的なトピアリー(topiary)⁴⁵や色鮮やかな花壇が流行した。花壇では温室で大量生産された半耐寒性の外来植物の苗が幾何学模様の花壇に盛り込まれ、庭園には輸入された多くの樹木が使われた。また画一的なテラスや大量生産の彫像や壺がトピアリーと共に備えられるなど庭園のデザインは硬直化しネオ・イタリアンとよばれるイタリア庭園を俗化したスタイルが流行した。

(3) カラー・スキームの原点

ロビンソンとジーキルは、ヴィクトリア朝中期に流行した大量生産・大量消費型の庭造りを批判した。彼らの理想は植物の植生とその育つ環境をふまえた新しい花壇の様式——ワイルド・ガーデンやウッドランド、イギリスの古きよき伝統を想起させるコテージ・ガーデンや植物の容姿や色彩を重視したボーダー花壇——であった。

ジーキルの園芸家としての出発点は、カーペット・ベッディング(毛氈花壇)に対する批判と、その代案としてのハーベイシャス・ボーダー(宿根草花壇)の提案に始まる。

述べてきたように、19世紀のイギリスでは樹木を中心とした風景式庭園への反動から庭に華やかな色彩が求められ、「ガーデネスク」が主流となった。花壇は原色の赤、黄色、青の花々が幾何学的なデザインにそって同じ高さに植え込まれたコントラストの強い色の取り合わせが好まれるようになる。しかし大量生産された植物や壺・噴水などがふんだんに使われるようになると庭は俗化し、花壇の華やかさはどぎつさに変った。さらにこれに食傷気味になると人々は華やかな植物自体を批判するようになった。

これに対してジーキルは、俗化したつまらない花壇のけばけばしさは植物自体に問題があるのではなく、植物をどのように扱えばよいかを知らない園芸家の、美的感覚と知識の欠如によるものだと主張した。そして自邸の庭で色彩論を庭に応用した宿根草のボーダーを試みたのである。これがジーキルのカラスキームの原点である。ジーキルは植物の本来の姿を花壇に活かすことによって、自然の優美さを庭で表現しようとした。

ボーダー花壇はボーダー(border:ふち、へり)を植物で飾る花壇で17世紀頃から行われていたものであるが、ジーキルはこれに独自の視点から改良を加えた。ボーダーに咲く花の時期を合わせ、前後左右に隣り合う花同士の色調和を考慮し、そのために植物の高さやそれぞれの容姿・肌理が互いに引き立てあうように植栽を計画的に行った。

(4) *Colour Schemes for the Flower Garden*『ジーキルの美しい庭』

本書の初版は1914年に発行された。彼女が亡くなるまでに6版を重ね、ジーキルの著作の中で最もよく知られた作品とされている。最初のアイディアはカーペット・ベッディングを批判して著したエッセイで、ロビンソンの『ザ・ガーデン』誌に投稿した「Colour in the Garden」(1882)にさかのぼる。それから20年以上を経て、この内容を発展させて*Colour in the Flower Garden* (1908)が出版された。これが版を重ねた後、カーペット・ベッディングで使われていた植物を正しく扱う方法を解説した一章(Bedding Plants;第9章)を加えて出版されたのが*Colour Schemes for the Flower Garden*である。

この改定版が出版された1914年にはジーキルがカラスキームをもって「庭における色彩の重要性」を提唱してから30年近くが経過しており、ジーキルは既に園芸家、ガーデン・デザイナーとしての名声を得ていた。

本書は、我国においてしばしばジーキルの色彩論として紹介されてきた。題名から内容が色彩に関するものであることは想像されるが、本書に「色彩論」を読み取ることはできない。本文のはじまりは早春のものさびしい森の風景描写と、そこに控えめに咲く花々に目をとめる筆者のまなざしである。そこから読者は庭の逍遥に導かれる。自邸の森をめぐる小道を散策しながらところどころで森に描かれた美しい「絵画」を眺め、それが筆者の手によってどのように「描かれた」のか、その「植栽の方法と工夫」が述べられる。森を

離れると庭にはいくつかの花壇があり、いずれも美しい自然な姿で見るものの眼を驚かせ、庭を散策する者はやすらぎと休息とに導かれる。森と庭、さらにそこに建つ家が全体として美しく調和し、統一感のある庭の様式というものの存在を感じさせる。

執筆の目的について著者が「(自分の庭造りの経験を)できる限り言葉で説明し、また設計図と写真で紹介すれば、一般の方々の役に立てるのではないかと考えるようになりました」と述べていることから明らかなように、本書では多くの写真図版を用いて、一般向けに啓蒙的な意味合いを込めながら園芸の実際〈How To〉を紹介し、わかりやすく「美しい庭」の解説に心を傾けている。原著には12枚の手書きの植栽図と著者自身が撮影した98枚に及ぶモノクロの写真が掲載されている。

「色彩を考慮して計画的に植物を植え、花壇を維持管理していくことは一般に考えられているほど簡単なことではありません。」と述べた著者は2章「森-ウッドランド」で、庭を造る者がガーデニングを芸術として理解することの必要性をつぎのように説く。「花への愛情はどんな種類の、どんな軽い感情であっても人のうちに他人への共感とやさしさを生み出すものです。(中略)しかしよりよい庭造りには状況に即した判断力が必要です。良識、目的の達成に向けて努力する誠実さ、美的センス、そして何の変哲もない土地に植物を育て、四季を通じて生きた絵の連作を作り上げる知識-それらが重要だということを熟考していただきたいのです。」

本書は、そのような庭造りの技法を紹介した園芸ガイドであると同時に、現代のイギリスの園芸において普遍的な価値を持つ20世紀のガーデニングの真髄を綴った一種の啓蒙書ともなっている。

4. カラースキーム

(1) 配色と色彩調和

配色とはある目的を達成するために対象物に複数の色を配することであり、英語ではカラーコンビネーション〔color combination 色の組み合わせ〕となる。これに対し、色彩調和〔color harmony〕は美的で快い効果を得ることを意味する。つまり絵画において色彩調和は配色と同義ではない。画面を構

成する多種多様な配色の生み出す全体性が調和であって、部分部分が必ずしも美しく快いわけではなく、寂しさや悲しみなども含む人間のさまざまな感情の表現でありうるためである。色彩調和はそのような主観を含んだ複雑な概念であって客観化はむずかしいとされる⁴⁶。

色を体系化しようとする色表示の試みには、マンセル⁴⁷やオスワルト⁴⁸による表色系(カラーオーダーシステム)があるが、考案者によって色表示の仕方が異なりそれぞれの特徴を持つ。配色は一般的に同系、類似系、対照系の三つに分けられる。色には色相、明度、彩度の三属性があるので、それぞれの表色系に応じて三属性に対応させた配色類型が考えられている。同系、類似系と対照系のそれぞれは色相環を用いて個別に分類することもできる。

このような表色系の研究などに代表される近代的な色彩論は、19世紀にフランス人化学者シェブルールの本格的な色彩調和の研究によって築かれた。シェブルールはゴブラン織りの研究者であったが、染色効果の研究から対比や配色を綿密に観察し、色の視覚効果は個人によって異なるものではなく、物理的な法則に従うと考えて実験を行った。その内容は『色彩調和と色彩対比の法則』(1839年)、『色相対比の法則とその応用』(1854年)として出版されている。彼のこれらの研究は19世紀の画家に影響を及ぼし、印象主義を生んだともいわれる⁴⁹。

ジーキルは個々の植物の葉の色や肌理も含めて樹木や、花の咲かない時期の植物体も色彩の素材として考えていた。本書の中では第1章でウッドランドの美しさに光の効果が絶大であることを述べ、第2章では大気の変化も捉えて、つかみどころのないそのような変化が「森の絵画」に及ぼす影響を指摘している。ジーキルは印象派の画家のように、光をキャンバスに描くことはなかった。しかし、光が射しこんだときに植物が見せる一瞬の美しさを捉え、その効果が最高となるように植物を配置して、「生きている絵画」(風景)を描いた。ジーキルが植栽図の設計に色彩を反映させることができたのは画家として色彩論を習得していたためであると考えられる。

(2) ジーキルのカラースキーム

ジーキルがロビンソンと共に痛烈に批判したカーペット・ベッディングにおいても、配色としてのカラースキームは庭師や園芸家によって行われてい

た。シェブルール的色彩論を庭の植栽に導入することの是非はジーキルが彼女のカラースキームを提唱するようになる以前から、植物の栽培・研究者や庭師によって園芸誌上で論じられている⁵⁰。

ジーキルのカラースキームをそれ以前の造園家や庭師のものと比較すると、まず花壇において、素材とした植物の種類が飛躍的に増えている。カーペット・ベッディングでは10種類程度の植物を使って花の色のコントラストがはっきり出るようにカーペット状に植えられたが、幾何学模様のデザインは複雑であっても使われる花の色は限られていた⁵¹。これに対してジーキルでは、ボーダー花壇の設計図では用いられている植物は花壇の大きさによって20～30種類か、あるいはそれ以上のこともある。マンステッド・ウッドのビッグ・ボーダーでは背景の樹木を含めると約100種類を数えた。

次にジーキルの場合、カラースキームが施された対象は独立した花壇だけでなく庭全体となっており、ウッドランドを含む敷地全体が対象となっている。例えば壁に植物をまとわせる場合、壁の見せ方を問題にし、植物の選択は壁や家の種類を考慮した。また庭に置かれる建造物、温室や納屋、ガーデン・オーナメント(garden ornaments)と呼ばれるベンチ(シート)やコンテナなども植物を中心に、これらの色彩が葉の色と競合しないように考えられている。カラースキームの対象をそこまで広げることはそれまで試みられていなかったといつてよいだろう。細部をゆるがせにせず、かつ目に映る空間全体にまで色彩の影響を認め、これを統制することによって庭全体がゆるやかに統一され、美しい調和が生み出されることになった。これはヴィクトリア朝のさまざまな様式が入り混じった混生庭園の対極にあった。

(3) 植栽と色彩

植物は時間の経過にしたがって生長し、衰える。花や葉の色彩を植栽に生かそうとするとき、花壇の美しさを一定期間保つために、土壌や気候条件を含む、植物の生長に関する知識と栽培技術は不可欠である。ジーキルの植栽の技術の背景には、彼女の広汎な植物学の知識があった。ジーキルは10代の頃から地中海沿岸地域やドイツなどをめぐる大陸旅行に出かけていたが、各地の植物に関心を持ち植物学的、栽培学的な研究を行っていた⁵²。1897年には英国園芸協会より、すぐれた園芸家に贈られるビクトリア・メダルを受

賞している⁵³。

ジーキルが園芸誌上で提唱した色彩設計に対して、同じ雑誌上に反論も寄せられていた。それらの反論の中には、さまざまな植物の開花期を揃えるというような植物の栽培上非常に複雑なカラスキームは現実的ではなく、園芸家がそれをするのは不可能であるとするものがある⁵⁴。これに対してジーキルは、自分が実際に試みて成功した事例のうち推薦できると考えた方法以外は発表していないと述べる。そして批判者に対してその実例をいつでも見にきてくれるようにと自分の庭に招いている⁵⁵。具体的には、植え替えを繰り返さずに自然な方法で多くの植物の本来の美しさを鑑賞するために、場所と季節を限定した花壇を複数造ることを説明し、それが労働力の節約にもなると書いている。庭の色彩と園芸学的な植栽の問題は分けて考えることのできない技術的な問題であり、そのためにもカラスキームは必須であった。

ジーキルはそれから30年の歳月をかけて、このような美しさを保つという所期の目的のためにさまざまな実際上の技術的な工夫をこらし、その中からドリフト (drift) という植栽の手法や、開花期の異なる植物をうまく組み合わせで見苦しくないように処理する、ボーダーの段差を利用した誘引の方法などを考案している。その色彩設計と技術の集大成が本書の内容となっているのである。

注

- 1 1857年に設立されたサウス・ケンジントン博物館併設のアート・スクール。現在ヴィクトリア&アルバート博物館となっている。
- 2 Sally Festing, *Gertrude Jekyll*, PENGUIN BOOKS, 1991. pp.31-37
- 3 Michael Tooley and Primrose Arnander, *Gertrude Jekyll-Essays on the life of a working amateur*, Michaelmas Books, 1995, p.64
- 4 J.M.W.Turner (1775~1851) イギリス・ロマン派の画家
- 5 『風景の思想とモラルー近代画家論・風景編ー』『芸術の真実と教育』共にジョン・ラスキン著 内藤史郎訳 2002 参照
- 6 Hercules Brabazon 水彩画家 ラスキンやラファエル前派の画家と交流があり「イギリスの失われた印象派」とよばれた。
- 7 G.F.Watts (1817~1904)
- 8 前掲 Sally Festing, *Gertrude Jekyll*, pp.56-57.
- 9 Michel Eugene Chevreu (1876-1889) フランスの化学者。 *The principles of Harmony and Contrast of Colours*, Paris 1839, London, 1854. 『色彩調和と同時対比の法則』により、近代の色彩調和論の基礎を築いた人物とされる。
- 10 Henry Cole (1808~1882) ロンドン万博の立案者で、1851年のロンドン万博の収益や展示品を元に1852年にサウス・ケンジントン博物館の前身、産業博物館を設立し、大衆美術教育を組織した。
- 11 藤田知里「イギリス、ヴィクトリア朝における学校美術教育と社会との関わり」『芸術教育実践学会誌』2004-2005, Vol.6, pp.66-67.
- 12 前掲 *Colour Schemes for the Flower Garden*, p.14.
- 13 *The Garden Book*, Phaidon Press, Limited. 2000., p.225.
- 14 Jekyll Gertrude: *Colour Schemes for the Flower Garden*, 8th edn. Suffolk, 1914, Antique Collection's Club Ltd. 1982, p.11
- 15 東京商工会議所編『カラーコーディネーション』カラーコーディネーター検定試験2級公式テキスト 2000年, pp.207-211.
- 16 藤田治彦監修『ウィリアム・モリスとアーツ&クラフツ』梧桐書院, 2004, pp.6-14.
- 17 ツルニチニチソウのパターンなどについては Michael Tooley and Primrose Arnander, *Gertrude Jekyll-Essays on the life of a working amateur*, Michaelmas

- Bookes,1995 p.43
- 18 ジル・ハミルトン他『ウィリアム・モリスの庭 デザインされた自然への愛』(鶴田静訳),東洋書林,pp.138-139.
- 19 裏から模様を叩いて浮き出し模様を打ち出した金属細工
- 20 前掲Sally Festing,*Gertrude Jekyll*,pp.83-87
- 21 Betty Massingham *Gertrude Jekyll* 60p図版15、16参照
- 22 前掲*Gertrude Jekyll-Essays on the life of a working amateur*,54p Figure 3.10
- 23 William Robinson(1838-1935)
- 24 William Howard Adams. *Nature perfected: gardens through history* Abbeville press.1991.pp.189～191
- 25 前掲『ウィリアム・モリスの庭』156～157pp
- 26 一例として、前掲『ウィリアムモリスの庭』pp.138-149.
- 27 Sir Edwin Lutyens(1869-1944)
- 28 Gertrude Jekyll, *Home and Garden*, Longmans Green&Co.,1900.Antique Collectors' Club Ltd.,1982,p.35
- 29 Jane Brown,*Gardens of A Golden Afternoon The story of a partnership Edwin Lutyens & Gertrude Jekyll*,A Penguin Books,1982.pp.33-35.
- 30 *The Garden Book*,Phaidon Press Limited.2000,p.225,p.320.
- 31 Betty Massingham, *Gertrude Jekyll*, Shire Publication,2000,p.18
- 32 投稿した主な雑誌は次の通り。Country Life; RHS Journal; Gardening Illustrated; The Ladies Field; The Gardian; Daily Express; Daily Mail.
- 33 前掲Sally Festing *Gertrude Jekyll*, p.123.
- 34 Michael Van Valkenburgh.(ハーバード大学デザイン学部ランドスケープ学科教授1991年当時)。
- 35 Judith B. Tankard and Michael R.Van Valkenburgh: *Gertrude Jekyll A Vision of Garden and Wood*, John Murray, 1989.pp.10-11.
- 36 前掲*Gertrude Jekyll A Vision of Garden and Wood*, John Murray, 1989.pp.3-8.
- 37 前掲*Gardens of A Golden Afternoon*, pp.188- 191.
- 38 前掲*Colour Schemes for the Flower Garden*,p.14.
- 39 *Gertrude Jekyll 1843-1932, A CELEBRATION*, Museum of Garden History, 1995.

- 40 William Robinson, *The English Flower Garden*, Penguin Books, 1883. pp.18-30.
- 41 前掲 *Gertrude Jekyll 1843-1932, A CELEBRATION*, pp.9-12.
- 42 渡辺義雄訳『ベーコン随想集』(1625) 46「庭園について」岩波文庫がある。
- 43 『エピクロス庭園または1685年の園芸について』(1685)がある。
- 44 アン・スコット・ジェイムズ『庭の楽しみ』(横山正訳)鹿島出版会, pp.96-103.
- 45 ツゲやイチイなど遅育性の樹木を装飾的に刈り込んで、幾何学模様や動物などある種の形に見えるように育てる技法。
- 46 『カラーコーディネーションの基礎』中央経済社, pp.177-178
- 47 A.H.Munsell (1858-1918) アメリカ人で画家、教育者。1929年に色表票を考案。
- 48 F.W.Ostwald (1853-1932) ドイツ人で化学者。1909年ノーベル化学賞受賞。
- 49 金子隆芳『色彩の心理学』岩波新書 85-126pp
- 50 Brent Elliot, *The Royal Horticultural Society: A History 1804-2004*, Phillimore & Co.Ltd., 2004, pp.270-271
- 51 前掲『庭の楽しみ』p.110. カルセオラリア, ロベリア, ゼラニウム, ヘリオトロープ, ベゴニア, マリーゴールド, サルビア, ジニアなど.
- 52 前掲 Sally Festing, *Gertrude Jekyll*, pp.83-85
- 53 前掲 *The Royal Horticultural Society; A History 1804-2004*, p.272.
- 54 *The Garden* Nov.25, 1882, p.470.
- 55 同p.471